

佛 教 音 楽

—生命いのちの流れとひびき—

渡 邊 顯 信

I はじめに

1 生命の実感—最近の世相から（現代の諸問題と佛教の役割）—

昨年、四～五月にかけて神戸の小学校六年生土師淳君の悲惨な事件がありました。その犯人が判明したのが六月末でした。しかし、その理由が何であったのかまだ明確ではありません。それを契機にしたかのように短期間のうちに、中学生数人のバタフライナイフを使った殺傷事件や校内暴力も報道されました。そしてまた去年後半くらいから一部の小学校では授業が成り

立たなくなり、学級崩壊という現象が起るようになりました。中学生くらいならまだわかりませんが、小学校の中で学級崩壊が多発しはじめてきました。このような低年齢化をその地域社会だけの問題に片づけてしまっていないものでしょうか。

このような事件の前に、一九九四（平成六）年一月一七日、ロサンゼルスでマグニチュード六・六の直下型地震がありました。翌年九五一年一月一七日には、阪神大震災が起りましたね。しかし私どもは、このような大事件の実感が少しずつ薄らいできてはいませんか。もう一つつけ加えますと、一昨日の五月二六日、オウム真理教の裁判に初めての判決が下されました。サリン事件の実行犯の一人、林郁夫被告に対して無期懲役の判決が出ました。事件の発生は三年前の九五三年三月二十日のことでしたが、時間がたつと、また、自分がその場に関わらなくなってくると、残念ながら忘れてしまいがちになるのが人間の弱点のようですね。私もそういう人間の一人なので自分の弱さを痛感するわけです。

サブタイトルの「現代の諸問題と佛教の役割」ということが、私ども佛教関係者にとり非常に大きな問題となるわけです。皆さんの光華女子大学、光華女子短期大学では大学の樹立の精神に真宗の教え、親鸞の教え、ゴータマブツダ、釈尊の教えが基本に流れています。そういう

佛 教 音 楽

意味ではあなた方も私どもも先生方も含めて、この社会問題に対して無関係ではなく、積極的に考えていかなければならないと思うわけです。

最近、臓器移植の問題が話題になっていますが、新しい生命創造計画としてヒトゲノム計画があります。これは遺伝子の操作に関する計画です。なぜ遺伝子を操作するのか。それは障害の要素を持った生命を事前に抹消する、即ち生命を絶つ、ということですが。生命を絶つということが科学的に技術的に可能になってきているのです。そこでは選ばれた人間だけが人間社会を形成し、弱者のことは考えられません。今後、人間社会がそういう方向に進んでいいのだからかという大きな問題になってきています。

昨年、イギリスのダイアナ妃が突然亡くなり、その数日後、カルカッタでマザー・テレサが亡くなりました。マザー・テレサの人類愛的活動のことは、皆さんも御存知のことでしょう。彼女が日本に来られたのは一九八一（昭和五六）年のことで、四月二日―二八日の約一週間滞在されました。世界の各地でいろんな方々と出会われ、心に残る数々のスピーチをされています。その中の一つに「Poor is beautiful」があります。貧しいことはすばらしいことだとおっしゃっています。それに関して有名な一つのエピソードを紹介しましょう。ある時マザー・

テレサが托鉢でいただいたお米を、近くに住んでいる非常に貧しい十数人の家族を持つ母親に分けてあげた。するとその母親は米の一部分を自分のところにもらい、残りを隣に回した。マザー・テレサが「なぜそんなことをするのか？」と聞くと、「隣の家族は数日間、何も食べてないの。自分の家族は何かを食べているので、いただいた中からわずかですが、分けてあげました」と。客観的にみて、この家族は物質的にも経済的にもプアーです。しかし、そのプアーな母親の心はまさしくビューティフルだと。それが人間にとって一番大事な心のありようであると思われたようです。

日本に來られたマザー・テレサは、そのすばらしい發展状況を見て、「日本は豊かな国だ。経済的にも恵まれている。しかし町を歩いている人々の表情の何と暗いことか。なぜですか？」と聞かれたそうです。豊かな美しい日本で、多くの孤独な人々を知り、心の貧困を感じたのだそうです。このことも「現代の諸問題と佛教の役割」という私の一つの問題提起でもあります。

マザー・テレサは「結局、人間というのは誰からも必要でないとされた時、一番不幸だ」とも云われています。物質的に恵まなくても経済的に恵まなくても、人から必要とされない

佛 教 音 楽

と感じた時、どれだけ自分が思い悩み、生きる希望を喪失することか。

現代の日本では少なくなりましたが、インドでは往來に横たわっているハンセン氏病の人たちや物乞いをしている病人たちをよく見かけます。その人々自身、死ぬ寸前まで持っているものが人間としての尊厳性です。「その尊厳性への失望感を少しでも癒し、人間性を回復させてあげたい」と云う彼女の行動が、多くの人々を絶望の淵から救ったそうです。たとえ死の直前の人であっても、愛情深く声をかけ介抱してあげると、その人はやすらいだ眼差しでシスターやマザー・テレサを見つめ、すがり、生気をとり戻し、安らかに死んで行くそうです。それこそ美しいすばらしい世界です。マザー・テレサの行動が具体的に認められた結果が、ノーベル平和賞をいただく理由になったことは、ご承知の通りです。

2 佛教とは何か？―その確認「基本的佛教用語」の理解―

皆さんは、今まで生きてこられた中で、私って何だろう。人生って何だろう。この世の中で何が真実なんだろう、と思われたことがありますね。それは、生きていくための一番大事なことです。この地球が持つ四六億年という歴史の中で、人間の歴史はほんのわずかです。学者に

よつては三百万年しかないという人がいます。個人の一生はほんのわずかです。ところが人間は、地上の中で一番優れている存在だと思ひ込んでいます。欲望のままにモノを作り、平気で残し捨てていく日本の現実。一方では同じ時間帯に、ある国では餓死していく人たちがいます。

そういう人間の大きな問題を、二千五百年前ゴータマブツダはすでに悟っておられました。

お釈迦様の悟られる前の名前をゴータマ・シッタールタと申しますが、シッタールタはある小さな王国の王子として生まれられました。幼少期に母親を亡くし、内省的な性格を深めていました。彼は人間存在の根源、真理を求めていました。その具体的内容が「生老病死」です。四苦とも云いますが、人間の苦悩を真剣に考えていった。二九歳の時に出家し、六年間苦行をしたと云われます。ブツダとは、真理を悟った者という意味です。それが今、佛教という形で我々の前に引き継がれてきています。この佛教に対して八百年ほど前の鎌倉時代、下級貴族の家系に生まれた親鸞が、「南無阿弥陀佛」という佛の働きを「他力」と読み替えて下さった、インド・中国・日本の七人の人師たちの宗教的自覚に導かれて、佛さまの大きな力を自分自身の身に感じとられていかれた。このような大きな伝統の流れの中で、私たちは、今、生きていくのです。

佛 教 音 楽

基本的な佛教用語の確認をしておきましょう。「縁起 *pratīya-samutpāda*」「無常 *anitya*」「無明(無知) *avidyā*」「真実(真理) 諦 *satya*」。これらの原語と意味は、レジユメに書いておきました。

ところで「*satya*」の言葉はオウム真理教で悪用されてサティアンと言われましたが、本来の *satya* は「真実であること、明らかなこと」という意味です。「*sat*」というのは、英語の *be* 動詞に当たり、サンスクリットでは「*as*」ですが、その語基の「*sat*」に現在分詞の語尾「*ya*」がついて「*satya*」。「あるべきもの、あるべきこと、真実」という大切な意味なのです。

3 宗教の本質「その本質的語義と慣例的語義」

「宗教」の語義には、本質的な語義と慣例的語義があります。本質的には「確立された結論・成就されたものの極致」という意味のサンスクリット「*Siddhānta*」の対訳語で、「*Lankāvatāra-sūtra* 入楞伽經」の五世紀頃の翻訳が最初と云われております。宗教という言葉は、本来佛教の根本真理を示すための言葉だったわけです。ところが、明治時代「*Religion*」

の対訳語として、安易に「宗教」の語を当てはめてしまい、以来、宗教という言葉と「Religion」という言葉が一つになってしまいました。

一方「Religion」という言葉の語源は、「re(再び)」+「√leg(拾う、読む、観察する)」或は、「re」+「√lig(結ぶ、縛る)」であると云われています。このように「Religion」は、「宗教 Siddhanta」と本来一つのものではありません。その点をぜひ知っておいていただきたいと思えます。慣用的には、「Religion」を「宗教」とせざるをえませんが、私は後日もっと適切な言葉に改めてほしいと思っています。

「宗教」の慣例的語義として、「啓示(Revelation)の宗教」と「目覚め(Buddha [自覚])の宗教」という意味があります。「啓示の宗教」は神の恩寵によって示されたものに基づく宗教。その場合は人間の理性や自覚は大きな問題ではありません。神の愛に合うことが大事です。佛教は「啓示の宗教」ではなく「自覚の宗教」ですから、あくまでも自分が目覚めることが佛教の基本です。真実に目覚めること、自分って何だろうという疑問は勿論、生命の本質に目覚めること、それが宗教の本質であり、我々佛教徒にとっては基本的な生活の姿勢ではないかと思えます。

佛 教 音 楽

4 人生と音楽―人間にとって音楽とは？―

ある方は、「音楽は生きているものの生命の内側に流れているものを具体化したものだ」と言われました。尾崎豊とか最近亡くなったヒデ、彼等なりの生命の表現が、彼らの音楽でありましょう。尾崎豊が亡くなった後に彼の音楽を聞いた時、ああ良い内容の作品だなと思いました。我々の時代にはなかった内容の音楽ですが、いい歌だな、響いてくる歌だなと思いました。本当の音楽は、人間の精神とか感性を高める、広める、深める働きがあります。しかし騒音にはないですね。雑音にもありません。本当の音楽はその人を高めます、深めます。人間にとって音楽がいかに大切な要素であることか。残念ながら今の受験戦争の中で音楽は軽視され、選択科目の一隅に追いやられています。一番大事な要素を、今日の日本の教育制度は失いつつあると言っても過言ではないと思います。

尾崎豊が一般的・通俗的な優等生だったらあのような作品はできていません。一般的には、彼は落ちこぼれの一人だったでしょう。苦しんだ挙げ句、心をうつあのような音楽を作った。何が正しいのか。何が人生にとり大切なことなのか、が自ずからはっきりしてくると思います。

彼はその問題を提示してくれました。しかしただ生命を絶ったことだけは残念なことでした。

親鸞聖人は浄土和讃の中で、「清風宝樹を吹く時は 五つの音声いだしつ つ 宮商和して自然なり 清浄勲を礼すべし」と示して下さいました。宮と商の音は、洋楽で云うD音とE音に当ります。D音とE音の音は隣同士ですからぶつかります。これは知識や理論的計算の世界から言えば不協和音ですが、佛教の受け止め方はそうではなくて、それぞれの音にそれぞれの響きがあり、そのまま調和して自然にアンサンブルできるのです。感性を高めれば、ものみなすべてに生命あふれたひびきを感じられ、聴く者の精神が高められ、深められるという世界がある。そこに溢れている清らかな音を大切にすべきであると歌っています。

Ⅱ 佛教音楽とは？

1 佛教音楽

音楽はあくまでも精神性や感性を高め、深めていくものです。ところで一つ、注意したいことがあります。美しいもの、すばらしいもの、それは往々にして自ら美しいとかすばらしいと

佛 教 音 楽

は名のりません。一見何もないと思われる中に美しさが潜んでいます。皆さん自身の中にも自分で気がついていない素晴らしい部分がかなりあるんです。自分がまだ気がついていないだけです。気がついてないことをこれからの人生の中で知っていくことが非常に大切なことなのです。ハッと気がついた時、それぞれに気持ちが開放され、相手の痛みに対して優しくなれるようです。優しくなった時には、いかなる人に対しても必ず何かの行動ができます。

阪神大震災の時にボランティア行動が盛んになりました。ご経験の方もいらっしゃるでしょう。何かせずにはおられないという気持ちがあつたからです。皆さんの中にあるまだ気づいていない大切なもの、それを佛教では「佛性」と言います。佛性を皆持っているわけです。佛性の世界が宮商和して自然ということ。Aさんの佛性もBさんの佛性も別々ですが、それぞれが和して自然になる。それを教えているのが佛教です。

佛教は、Buddha 自覚者（眞実を覚った人）の教え。「音」は、眞実のひびき、心にしみるひびき、心の交流です。「楽」はその交流を楽しむことでしょう。「楽」の字には、「願い」という意味があります。親鸞聖人は「楽」という字を「願い」という意味で使っておられます。それが「佛教音楽」という世界です。

「釈尊 Śākya-muni Buddha」 「シヤーカーキヤ Śakya」というのは族名です。姓がゴータマ Gotama で、シッタールタ Siddhartha というのが名前です。その生涯や布教活動については、光華女子学園編集の「聖典」の「歴史篇」に紹介されてあります。釈尊が歴史上の人物として理解されたのは明治以降と言っても差し支えないと思います。一八九七（明治三十）年、ネパールで釈尊の遺骨が発見されました。それまでは釈尊という存在、ゴータマ・ブツダという存在は伝説上でしかなかったのですが、この発見によって初めて歴史上の人物であることが実証されました。

さて、釈尊と音楽に関する話がパーリ語経典の中にあります。パーリ語とは佛教聖典を記録するための言語で、釈尊が使っていたしゃった言葉に一番近い言語といわれています。「帝釈所問経 Sakka-pañha-sutanta」（長部経典 Digḥa-nikāya xxi）によりますと、音楽神ガンダツバの子パンチャシカ（五髭）のヴィーナによる弾き語りを聴かれた釈尊が「お前の弾き語りとはともに調和していた」と喜ばれています。

パンチャシカよ、いま汝の「弾いたベールヴァ製の黄色いヴィーナの」絃の音色は、汝の歌声と調和し、歌声は絃の音色と調和していた。しかもパンチャシカよ、「汝の」その絃

佛 教 音 楽

の音色は歌の音色に勝らず、歌声は絃の音色に勝ったものではなかった……云々とあります。

ところで、次に「結集（釈尊没後の經典編纂會議）」と書きましたが、「結集」の原語 *Saṅgīti* も実は音楽と関係があるのです。「共に歌い合う」という意味であります。つまりお互いに唱え合い、確認し合う姿勢（アンサンブル）の大切さを示しているわけです。

2 佛教音楽 その流れ

佛教音楽は、佛教の北伝・南伝の流れとともにインドから、アジア各地に伝播されていきました。

インドでは、ガンダーラ、アジャンター、エローラ等の遺跡に残されています。その中にはヴィーナや笛を演奏している絵画が残っています。それがインドからスリランカに伝わります。即ちアショーカ王の時代、王子のマヒンダによって初めてスリランカに伝えられたと云われています。その佛教は南伝佛教で、上座部佛教でした。メロディーをつけて読誦されるガーター（偈文）二種類を引用しておきました。一つは「三帰依 [Tisarāna]」です。

Buddham saraṇam gacchāmi

ブツダン サラナン ガツチャーミ

みずから佛に帰依したてまつる

Dhammam saraṇam gacchāmi

ダンマン サラナン ガツチャーミ

みずから法に帰依したてまつる

Saṅgham saraṇam gacchāmi

サンガン サラナン ガツチャーミ

みずから僧に帰依したてまつる

一句目は、「私は（佛様の教え）を拠り所にして生活して行きます」という意味です。お気づきの通り、佛法僧の三宝への帰依を表明しています。

ところで「gacchāmi（私は行きます）」の「[g]」という語尾は、一人称単数形です。「人は」とか「我々は」というのではなく、「私は」ということです。先きほど「佛教は自覚の宗教である」と言いましたが、佛教の基本がここにあるわけです。その中で最後の「僧」は、集まりという意味で真宗の同朋という考え方の基本でもあります。

二つめは、『法句経 Dhammapada 5』。

佛 教 音 楽

Na hi verena verāni sammant'idha kudācanam,

まじく この世では、怨みによつては怨みは決して消える（しずまる）ことはない、

averena ca sammanti, esa dhammo sanantano.

怨みより離れてこそ消える、これが永遠の眞実（教法・基本）である。

怨みを忘れることは人間として非常に難しい。しかしそれを実践された例を紹介しましょう。一九五一（昭和二六）年、サンフランシスコで第二次世界大戦の終結の会議が開催されました。その対日講和会議でほとんどの国が日本に賠償を求めましたが、スリランカ代表の Jayewardene 氏、後に大統領になりましたが、スリランカだけがこの「Dhammapadaの言葉」を引用して日本への賠償請求権放棄の演説をされ、各国代表にも感動を与えられました。恩を受けた日本人の私たちが忘れがちですが、スリランカの方々は佛教精神実践例としてよく覚えておられます。こういう佛教精神の実践を知り学ぶことが現代の社会問題を考える上で一つのきっかけになるのではないのでしょうか。

さて、東南アジアの Boro Budur、Angkor Vat 等にも遺跡として残されています。また、

ジャータカといわれる釈尊の前世物語等が刻まれています。目を転じますと北方のチベットでは、秘境と言われているだけに、インドとか東南アジアとは違ったものになります。ラマ教の影響を受け、地域性に応じた佛教が伝承されていきます。特に音楽が大きく影響しました。長いアルペンホルンのような楽器ジャンドウンや、シンバルのような楽器を勤行の際に使用し、リズム、メロディを際立たせるわけです。

中央アジアでは、三世紀頃ガンダーラを経由して中央アジア、トルスキタンへ伝承されました。そして、佛教音楽が最盛期を迎えていたことがガンダーラ系やトカラ系の美術の形で、文化遺産として現存しています。しかし、中央アジアでは九世紀以降、佛教の北伝がストップしてしまいました。それはウイグル民族が居住するようになり、イスラム教が勢力を拡大したからです。イスラム教は片手にコーラン、片手に剣の宗教と言われ、一見して闘争的な宗教団体のように思われがちです。本来はそうではないのですが、それを守る人たちの姿勢に闘争姿勢があるのでしょう。その教線拡張のために佛教遺跡、寺院が破壊されてきました。現在残されている遺跡の中で佛像の顔面が破壊されたり、首が取られているものがあります。人間の闘いの実証であるとも云えましょう。

佛 教 音 楽

中国へは前漢時代に伝わりました。孔子や老子等の思想である儒教、道教が中心でしたが、その中に佛教がとり入れられ、影響しあっていきました。唐時代には音楽も盛んになっていきます。当時、中華思想、つまり世界中で中国が一番中心であるという思想の中で音楽も利用され、音楽文化の国家という状態にまで発展していきます。「散楽」等の平易な形となって生活の中に流行していきました。

日本へは漢文化と共に入ってきました。日本では「散楽」が「猿楽」となり、その発展したのが「能」であります。

次の「声明 Sabda-vidyā」が日本文化に与えた影響は多大なものがありません。「Sabda」は「音声」、「vidyā」は「明るく」ということです。文字通り「Sabda 音、声」を「明らかにすること」が声明です。当然ながら音楽だけでなく言語学、文法学も Sabda です。五明の学問の分類体系の一番目におかれるわけです。

五明の内容はレジュメに書いておきましたが、一番が因明 Hetu-vidyā、二番目が内明 Adhyātma-vidyā、四番目が医方明 Cikitsā-vidyā、五番目が工巧明 Silpa-karma-sihāna-vidyā です。

声明が日本に伝わった当初は、インドの音楽「梵唄」が主でした。七五二年、東大寺の大佛建立開眼法要の時、法要の中心になれる資格を持った僧侶が日本にはいませんでした。その法要の中心になった方がインド人の方でした。Bodhisena（菩提僊那、ボーディセーナ）が招聘されて導師になり盛大に勤められました。それ以降、日本でも資格をとる人たちが増え、平安時代には、佛教儀式として整備されました。佛教音楽も「梵唄」から「声明」と表現されるようになりました。現代でも声明、佛教音楽という言葉が併用して使われています。その表記法として楽譜がありますが、声明はその音譜を「博士^{はかせ}（墨譜）」といいます。

それから、近・現代のあゆみですが、特に、西欧文化の導入と一緒に明治以降が中心になります。明治以降に初めて佛教音楽という現代的な、西欧のものを含めた動きが始まってきます。一八七九（明治一二）年、東京芸大の前々身に当る「文部省音楽取調掛」が設置され、洋楽の手法を使ったり、雅楽の手法を使うという和洋折衷の時代です。越天楽の旋律をそのまま使ったり、西洋の旋律に日本語の歌詩をつけた唱歌等が使われた時代です。特に具体的には、一九〇〇（明治三三）年、二二歳の滝廉太郎が「花」を発表しています。この曲は、洋楽の音階を使った日本で初めての二部合唱曲です。現代でもよく歌われていますね。未だに新しく感じ

佛 教 音 楽

させられるのは、本物を表現しようとした願いが、常に新しいからです。佛教唱歌・佛教童謡も提唱され佛教音楽の創草期でありました。

一九〇二（明治三五）年には、東京浅草の九品寺に「佛教音楽会」が創設されました。

大正時代は大正デモクラシーと言われた活気に溢れた時代でした。唱歌が中心の「赤い鳥」という雑誌が発刊され、作曲家山田耕柝・成田為三が活躍しました。一方童謡を中心とした「金の舟」という雑誌も発刊され、作曲家中山晋平・本居長世等が活躍しました。そのような中で一九一八（大正七）年に「恩徳讃」が、一九三三（大正一二）年には浄土真宗の立教開宗七百年記念に「真宗宗歌」が作られました。

昭和になりますと「佛教音楽の時代」と言われるようになります。一九二八（昭和三）年、文部省宗教局の中に「佛教音楽協会」が設置され、その後、昭和一五年、戦争で中断されるまで、毎年新しい佛教讃歌の創作活動が続けられ、演奏会で公表されています。合計十一回の公演会で一七三曲に及ぶ作品が発表されました。一九四五（昭和二〇）年以降、全て軍国主義という価値判断で断罪しようと思いますが、実は軍国主義時代にもこういう活動があったことは驚くべきことだと思います。軍国主義時代の中で抑えられながらも、こういう人間としての生き

方が求められていた活動があったこともぜひ記憶に残しておいていただきたいと思います。将来、仮に周囲の状況から不当な圧力をかけられても、自分はどう生きたいかという願いだけはぜひ持ち続けて下さい。

戦後の歩みですが、レジユメに概略しましたとおり、一九四七（昭和二二）年の「大谷楽苑」や「日本宗教音楽協会」等の創設を契機に、多くの作品が作られてきます。釈尊をテーマにした作品に、一九五〇（昭和三二）年の清水脩作曲「交声曲 樹下燦燦」、一九五六（昭和三一）年の伊藤完夫作曲「交声曲 佛陀」そして、一九五八（昭和二三）年には黛敏郎作曲「交響曲 涅槃」が発表されました。佛弟子の讃歌としては、一九五八（昭和二八）年に学生佛教音楽研究会の委嘱作品として、清水脩作曲「交声曲 阿難」等が発表されました。清水脩先生は真宗大谷派の寺院出身の方で、日本の合唱音楽界を育成されたり、創作オペラ等邦人作品の普及発展に尽力された方です。一九七三（昭和四八）年には、親鸞聖人生誕八百年記念の委嘱作品が、井上靖作詞の「頌讃曲 親鸞」として松下真一作曲で発表されました。

ところで今世紀二〇世紀は、科学技術が優先され発達した時代です。特に経済が最優先された戦後の日本は、めざましい経済的成長を遂げた反面、副産物として現在の多くの問題点を招

佛 教 音 楽

いたり、失ったものも多くありました。マザー・テレサの日本人への疑問でもあるわけです。個人的にテレビゲームで楽しむことはあっても、子どもたちが仲間同士でゲームをしたり空き缶等、周囲の不用品を遊び道具に工夫して戸外で遊ぶことが少なくなっています。残念ながら氾濫するテレビゲーム等に興じるのが遊びの主体になってきた時代のようなのです。そういう中で「ムカつく」「キレル」という短絡的な言葉になり、直情的な行動に直結してしまふ。そして相手を殺傷してしまふ。悲惨なことですから黙ってられませんか。そういう殺傷事件中心の世の中になっていいというはずはない。あなた方の時代、そうなるのは困りますよね。我々は何とかしてこのような殺伐風潮の頻発傾向を止め、それを修復していいようではないか。そういうことを考えていかなければならないと思うわけです。

Ⅲ 佛教音楽 そのひびき（テープ演奏）

実際に、音楽を数曲お聴きいただきましょう。

まず、一九三二（昭和七）年に発表された「佛さま」という歌です。ボニージャックスと東

京の下町の子どもたちが歌っています。易しい言葉で親子の感情が自然に表現されています。

佛さま 山田 静作詞 小松 耕輔 作曲

一、のんの ののさま ほとけさま

わたしのすきな かあさまの

おむねのように やんわりと

だかれてみたい ほとけさま

二、のんの ののさま ほとけさま

わたしのすきな とうさまの

おててのように しつかりと

すがってみたい ほとけさま

佛 教 音 楽

三、のんの ののさま ほとけさま

みあかしあげて おがむとき

おすがたみえて きらきらと

ごここのひかる ほとけさま

二曲目は「わらんべ音頭」。子どもたちも一緒になって踊っている盆踊りの情景を表現した
ものです。

わらんべ音頭 わらんべおんどう

工 清定 作詞

渥美 芳映 作曲

清水 脩 編曲

一、星がまたたく お寺の庭に ほし てら

お盆おどりの 輪がまるい ぼん わ

おどるみんなの 心もまるい おどる こころ

まるいお顔の ほとけさま まるい かほ

シャンシャン ヨーイトナ
シャンシャン シャンときて
みなおどれ

二、虫もうたうよ 銀杏のかけに
笛やたいこの 音がはずむ
おどるみんなの 心もはずむ
はずむ音頭に 天の川
―くり返し―

三、光る稲妻 お寺の屋根に
お盆おどりの 手が揃う

佛 教 音 楽

おどるみんなの 心も揃う
揃う稲穂に 稲びかり
—くり返し—

四、風がささやく 柳の枝に
かざすうちわの 手がやさし
おどるみんなの 心もやさし
やさしおめめの ほとけさま
—くり返し—

三曲目は「大谷楽苑」が一九四七（昭和二二）年に公募した讃仰歌十曲中の七番目の曲です。

ほとけさまは

森山 美苗 作詞

弘田 龍太郎 作曲 (大谷楽苑選定)

一、ほとけさまは どこにいらっしやる

春は 花咲く 枝のもと ララ

夏は 水辺の 草のかけ ララ

秋は 空ゆく 雲の上 ララ

冬は 窓うつ 雪の中 ララララ

いつも どこかで みていてくださる

いつも 何かを おしえてくださる

ほとけさまは

あれあれ あそこに いらっしやる

二、ほとけさまは どこに どこに いらっしやる

お眉 ま白な おじいさま ララ

佛 教 音 楽

お目々め やさしい おばあさま ララ
お胸 豊かな お父さま ララ
お手々 清らかな お母さま ララララ
昼でも 夜でも 守ってください
いつも あなたを 支えてくださる
ほとけさまは
あなたの おそばに いらつしやる

お聴きの通り、決して難しい言葉ではありません。易しい言葉です。伝統的な日本の家族関係を日常生活を通して自然な流れで歌われています。それが本来の佛教のあり方です。教義的に説明しようとすると難しくなりますが、この歌に現れているような自然な人間関係を感じ合おうとするのが佛教の基本です。これからの生活の中で機会をみつけて触れてみて下さい。

Ⅳ むすび 佛教音楽 その目的

基本的には真実の生命、本物と出会うということ、お互いのひびきが出会うということ。どのような状態でも意志がありさえすれば心の交流が可能だということが佛教音楽の基本であります。聴覚障害者の方にも視覚障害の方にも、お互いの心を聞いた時にひびきが伝わる。必ず伝わるんです。それが生命いのちの働きであります。生命いのちあふれた何人かの方々の言葉を引用してみました。

最初の言葉は、ベートーベンの晩年、彼が耳が聞こえなくなっていた時に作った作品の一つに「荘嚴ミサ曲」がありますが、その冒頭に書きなぐってある言葉です。

『Von Herzen—Möge es wider—zu Herzen gehen』

(心から そして再び 心へと伝わらんことを。)

この意味は「神のみ心から自分の心へ伝わって来たひびきを、願わくば、演奏者の心を通して、聴衆の心へ伝わらんことを…」という、願いなのでしょうね。

佛 教 音 楽

次は、本願寺派二一世明如上人の二女で、社会事業にも尽力された九條武子夫人の歌です。

【抱かれて ありとは知らず愚かにも われ反抗す 大いなる御手に】

私たち自身、両親から支えられていることに残念ながら気がつかないことがありますね。親友から大事にされていることに気がつかないこともあります。心を鎮め、内省してみると、納得できる歌ですね。「愚かにもわれ反抗す」そのことを見事に表現しておられます。

【本当のものがわからないと、本当でないものを本当にする】

(安田理深)

例えばオウム真理教の問題も同様ですね。本当の佛教のことがわかっていなかったために、間違った考え方の指導者に有能な若い人たちがついていってしまった。そしてサリンで十二人もの人を殺してしまった。「本当のものがわからない」で「本当でないものを本当に」した結果が、この悲惨な現実となりました。

【自分の眼を明るくするのが勉強だが、

眼をふさがれたり曇らされたりする勉強をしてゐて、

勉強をしてゐると思つてゐる事はないだらうか」

一九九一(平成三)年、九七歳で亡くなられた画家中川一政さんの見事な言葉です。

「自分の番—いのちのバトン—」

父と母で二人 父と母の両親で四人 そのまた両親で八人

こうして数えてゆくと 十代前で一千二十四人 二十代前では……?

なんと百万人を超すんです

過去無量の いのちのバトンを受けついで 自分の番をいきている

それがあなたのいのちです それがわたしのいのちです

(相田みつを)

ともすると私たちは自分の存在しか気がついていませんが、自分の生命が存在する前に、十代さかのぼると、千二十四人の親がいるのです。二十代さかのぼると百四万八千五百七十六人の親たちの生命があったのです。そういう親たちの願い、生命の流れの現在に、私たちはいる

佛 教 音 楽

わけです。皆さんが結婚される、お子さんが生まれる。一代目、二代目、三代目と続いていく。その生命の流れの大切な前に「私たちがいる」ということです。大切な場所を大切に生活することによって、生命のバトンを次に渡していける。もし安易に生活していたら、大切な生命のバトンを次の子どもたちに伝えられません。我々の人生は決まっていますが、昔から伝えられてきた生命の流れ、願われてきた生命の流れ、我々が願っていく次への流れの中に、私もあなた方も現実に立っているわけです。立っていることを改めて考え直してみたい。できる限り責任あるバトンを渡していこう。責任ある発言をしていこう。責任ある願いを伝えていこう。ですから責任ある気持ちをひびかせあっていこう。そういうふうに願いたいです。そうありたいです。

そのようなひびきに気がつかせられて行く、それが佛教音楽の大きな目的の一つなのです。佛教音楽は特別の美声や技術に恵まれた人たちが演奏することだけではありません。私自身の経験から申しますと、私は声楽の落ちこぼれでしたが歌わなくても参加できる場所がありました。それは真ん中に立つことでした。指揮者は幸い歌わなくてすみます。歌えなくても声が悪くてもアンサンブルに参加できるのです。しかも歌える人々の力を借りてです。

このように夫々の分限を尽し合って行くことで、お互いに役立って行ける世界……。その世界を感じ合うことが佛教の基本姿勢だと思っています。身近な音楽を通して、ぜひ皆さんも歌でも器楽でもご縁がありましたらアンサンブルに参加してみてください。或いはボランティア活動にも、心身をこめて参加してみてください。聴きあつて響かせあう喜びや、共に話し合つて深まる心の交流に直結するはずです。そこから新たな生きる喜びが、エネルギーが湧いてくるはずです。

幸いあなた方はお母さんになれますよね。私も男性はお母さんになれないんです。子ども
の親にはなれますが母親にはなれません。子どもにとつて父親以上に母親がいかに大切な存在
であることか。安心できる存在であることか。「安」と云う字は「ウ冠」に「女」でした。本
質的にも間違いないと思います。ぜひそういう母親になっていただきたい。これから厳しい社
会状況が続きますが、どうぞ残された学生生活を、また社会人となつてからも皆さんが個々の
精神性という心の田圃を耕しながら、精神文化活動を深めながら充実した人生を送つて行つて
いただきたいと切に願う次第です。長時間ご静聴いただきましてありがとうございます。